



モノをつかむのに威力を発揮する
グラブバケット

「他の人との出会いで、人格や自分の能力も高められる」と人との出会いを大切にする生き方。戦時中、父親が旧満洲（現中国東北部）の遼陽^{りょうりやう}で医者をしていた関係で旧満洲生まれ。父は信仰心のあついクリスチャンでもあった。母親と本人、そして弟の3人で終戦（昭和20年）の年の冬を越えて引き揚げ、長崎県佐世保市で幼少期、青春期を過ごした。そうした人生の荒波^{らぎなみ}をくぐってきた体験もあってか、「出会いの大切さ」を真摯に捉える。「中国との取引も多いですが、そうした出会いで、碰^{ボン}、結^{チエ}、縁^{エン}、絆^{バン}という字で人のつながりについて話をすると、たちまち友だちになります」と語る。

トップは 挑戦する

Challenger's
Belief

よしだ・まきお

1938年(昭和13年)11月11日旧満洲(現中国東北部)生まれ。長崎県立佐世保南高を経て61年青山学院大学卒業。63年東部重工設立に参加。64年入社。65年東部重工工業株式会社設立。82年取締役、96年代表取締役社長に就任、現在に至る。出会いの大切さを大事にする経営を實踐。

一品を丁寧に

「大企業がやると失敗する業種。一品一品をていねいに作りあげていく仕事です。設計力、技術能力が求められます」と自らの事業の要諦を語る。

会社は、一九六三年(昭和三十八年)、「東部重工」として出発。戦後、高度成長期に入り、貿易も盛んになり、食料や工業用の原材料の搬出・搬入・運送の大規模化、効率化が求められていた。

そうした中、創業の年に明治製糖向けに原糖用バケットとその関連製品を納入したのが製品第一号となった。六四年、旧ソ連向けに船舶用デッキクレーンのクラブを生産、会社経営を軌道に乗せていった。

本人は六一年大学を卒業、社会に出た後、「東部重工」の設立に参画。六四年東京オリンピックが開催された年に入社(現在の東部重工工業は六五年に設立)。九六年(平成八年)社長に就任、社業を発展させてきた。

製鉄所の岩壁荷揚用の大型クラブバケットを初めて設計・製

東部重工工業社長

吉田 牧男

港湾や貨物船のデッキクレーン用クラブバケットで唯一の専門メーカー

「世界中のあらゆるモノをつかみ、はこぶ独自製品作りを」

作(七〇年)、本四架橋工事で世界最大の電動油圧クラブバケットを納入(七三年)。さらには、わが国初の本格的な無線操縦式の『軍索クラブバケット』を開発したりと、モノをつかむ(grab)製品のクラブバケットや、持ち上げる(lift)機器のコイルリフターなどの開発で製品開発力を発揮してきた。

ユージーは海運会社のほかにも各港湾施設、造船、電力、製鉄、セメントと広い。そして世界の港湾や各産業領域に広がる。

そうした多種多様なユージーのニーズに迅速に対応していくために、これまで受注生産だった生産システムをつくり置き生産にシフト。そして東日本と西日本に生産拠点を配置。工場は本社工場(千葉県浦安市北栄四―二―二〇)のほか、浦安(浦安市千鳥)、船橋(千葉県船橋市)、佐世保(長崎)、武雄(佐賀)の五工場を数える。

各工場は、ゆとりのある敷地内にあり、開発や製作設計のほか実証実験を行えるのが強み。アフターサービスを含めて万全

の体制で臨む工業配置である。こうして作られた同社製品の寿命は長く、二十年から三十年持つと言う。

時代の変化、世界の変化にどう対応していくか――。主要顧客の海運業界では世界規模でタックスヘブンを(税金天国)のパナマやリベリアに船籍を置くところが増加。日本製のクラブバケットが海外で使われるところから、『内産・外消』の傾向が続く。

少子高齢化、内需縮小で、縮むニッポンといわれる中、どういうスタンスで臨んでいくか。

「今後、成長が見込まれるアジア圏を日本と同じ感覚でとらえていくときだと思えます。そうとらえれば、『内産・内消』ですし、日本企業の組織力など強さを発揮していきます」

そして、「何といても、人の育成が一番大事です。再教育に力を入れていきます。とにかく付加価値の高い製品作りを手がけていきたい」と人材育成、製品開発の話になると熱がこもる。人の能力の掘り起こしに熱心な経営者である。(村田記)